『西南アジア研究』No.47, 1997

サハーウィーの参照した歴史関連文献

伊　藤　隆　郎

はじめに

マムルーク朝時代は,数多くの年代記や地誌,伝記集が著された時代である。しかも,その多くが現在にまで伝わっており,アラブ史を研究する者にとって,最も恵まれた史料状況にある時代の一つということができる。

Guo 1997が指摘しているように,従来我々は,これらの史料が書かれた立場や依拠した情報源を確かめ,相互の関係を明らかにするといった史料批判を十分にしないまま,研究を行なってきた。

無論,マムルーク朝時代のヒストリオグラフィーについて,先行研究が全くないわけではない。例えば,マムルーク朝時代前期に関する年代記や伝記集の記述を比較,検討したLittle 1970は,その代表的なものである[1)]。その他にも,個別の著者や著作を中心に論じた研究は,既にいくつか存在する[2)]。しかしながら,それらの多くは,マムルーク朝時代の前期(1250—1382年)に関わるものである。後期(1382—1517年)には,マムルーク朝時代を研究する者にとっての基本的文献とも言うべきマクリージー al-Maqrīzī (d. 1442), *al-Sulūk li-ma'rifat duwal al-mulūk* やイブン・タグリービルディー Ibn Taghrī Birdī (d. 1470), *al-Nujūm al-zāhira* をはじめとして,著名な史料が多数書かれているにもかかわらず,この時期を対象とするヒストリオグラフィー研究は,これまでのところ,ほとんどなされていない。

前期と比べ,後期の文献の史料批判の作業は,参照しなければならない文献の数が膨大な上に,それぞれがまた浩瀚なために,より一層の労力を必要とする困難なものである。上述のような現在の研究状況は,そうした事情に起因すると考えられる。だが,その作業が研究の前提として不可欠であることは言うまでもない。マムルーク朝時代の,特にその後期の史料に関する文献学的研究を進めていくことが,我々にとって重要な課題として残されているのである。

以上のような認識のもとに,本稿では,サハーウィー Shams al-Dīn Muḥammad al-Sakhāwī によって著された *al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-ta'rīkh* を取り上げる[3)]。本書は,その題名を『歴史家を非難する者に対する批判の表明』,あるいは『歴史家を非難する者への反論』とでも訳することができる。それが示すように,歴史学がいかに役立つ学問であるかを,さまざまな文献を参照,引用して論じたものである。既にF. Rosenthal氏による優れた英訳

もあり[4]，以前からよく知られた史料である。本稿の目的は，サハーウィーが本書を執筆するに際して参照した歴史関連の文献を整理し，分析することによって，マムルーク朝時代の末期を代表するウラマーの一人であった彼が，どんな文献を手近に利用できたかを明らかにすることである。そして，それを手がかりにして，サハーウィーが生きた当時において，いかなる書物が読まれ，どのような評価がされていたかについて若干の考察を試みることにする。

筆者としては，この作業が，未だ遅れているマムルーク朝時代後期のヒストリオグラフィーに関する研究の準備段階になればと考えている。

I　サハーウィーの出自と経歴

al-I'lān bi-l-tawbīkh の著者であるサハーウィーの出自と経歴については，拠るべき先行研究に乏しいので，最初にそれらについて触れておく。

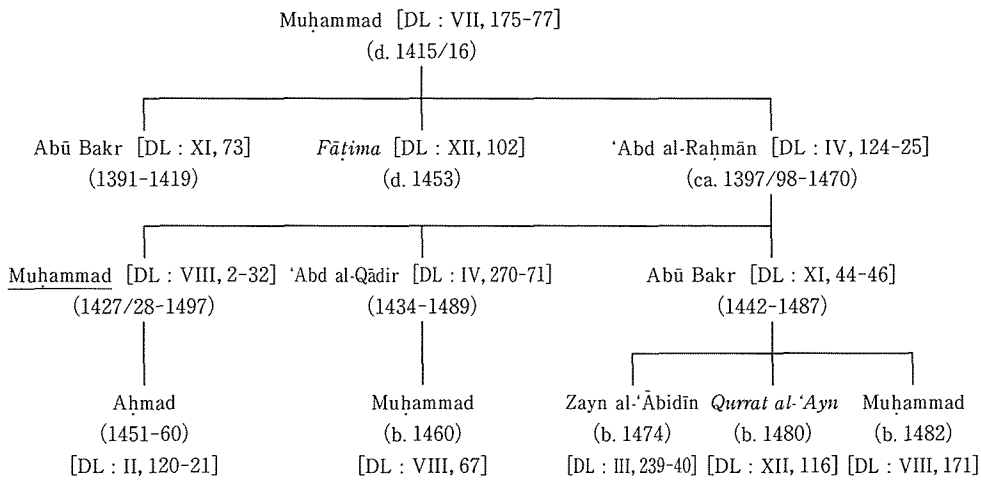
その際，主として利用したのは，彼の最も有名な著作 *al-Ḍaw' al-lāmi'* である[5]。これは，イブン・ハジャル Ibn Ḥajar al-'Asqalānī (d. 1449) による 8 /14世紀の人物についての伝記集 *al-Durar al-kāmina* の続編を意識して書かれた，9 /15世紀に生きた人物の伝記集で，収録されている人数が約12000人と非常に多いことと，その記述が詳細であることのために，最近特によく利用されるようになった史料である。この中に，彼自身やその親族の伝記も収められている。

サハーウィーによれば，彼の家系は元来バグダードの出身であったという [DL : VII, 176]。そして，おそらくは曾祖父の代に下エジプトのサハー (Sakhā) に移住し，そこで祖父の Muḥammad が生まれた。その後 Muḥammad は，カイロに移り住み，近くに住む，当時の著名な学者 Sirāj al-Dīn 'Umar al-Bulqīnī (d. 1403)[6] と，その息子で後にシャーフィイー派大カーディーになる Jalāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān al-Bulqīnī (d. 1421)[7] などから，ハディースなどを学んだ。ただし，彼は糸を商って生計を立てる (al-takassub li-'iyāl-hu bi-ghazl) 商人であって，学問にだけ従事していたわけではなかった。

サハーウィーの父 'Abd al-Raḥmān もまた，糸を商うかたわら，Jalāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān al-Bulqīnī や，後にサハーウィー自身の生涯の師となるイブン・ハジャルなどに就いて学問にいそしんだ。

その他，この家系の中では，サハーウィーの弟の 'Abd al-Qādir，そしてその息子の Muḥammad が，いわば家業を継いで糸屋を営みつつ，学問に取り組んでいる。したがって，サハーウィーの家系は，純粋なウラマーの家系であったというよりは，学問をすることに熱心な商家だったというべきであろう[8]。

このような家系にサハーウィーは生まれた。ヒジュラ暦831年 Rabī' I 月，西暦では1427年12月か翌1428年 1 月のことである。さきに触れたように，彼の父は学問に積極的に取り組んだ人であったから，子供の教育にも熱心だったらしく，かなり幼い時からサハーウィーを連れ



サハーウィー家系図

注

・下線を付されているのがITの著者

・イタリックは女性

て，幾人もの学者の下で教育を受けさせたようである。そして，1434/35年，7才くらいの時には，早くも父親と一緒にイブン・ハジャルのところに行って，ハディースの講義を受けている[DL : VIII, 5]。サハーウィーがイブン・ハジャルを非常に敬愛していたことはよく知られているが，以後，イブン・ハジャルが生きている間は，ほとんど彼の下を離れずにハディース学に没頭し，カイロから遠いところに出かけることはなかったようである。イブン・ハジャルのほかでは，Sharaf al-Dīn Yaḥyā al-Munāwī (d. 1467)，Amīn al-Dīn Yaḥyā al-Aqṣarā'ī (d. 1475)，Sa'd al-Dīn Sa'd al-Dayrī (d. 1463) など，有名な学者に就いて学び，エジプト周辺に住む400人以上から教えを受けたという[DL : VIII, 7]。そして，20才になる前頃に，自分が教わった先生の伝記(mashyakha)を書くことから，その著作活動を始めたと述べている[DL : VIII, 15]。

1449年，イブン・ハジャルが死ぬと，その後，いつとは明確に記されていないが，メッカに巡礼に出かけ，そこでおよそ30人の学者に就いて学んだという[DL : VIII, 7 - 8]。以後，彼はアレキサンドリアなど下エジプトや，アレッポ，ダマスクスなどのシリア地方に遊学し，下エジプトで約50人，シリアでは100人ほどの人の下で学び[DL : VIII, 8 - 9]，こうして80カ所以上を回って，1200人以上もの学者から教えを受けたということである[DL : VIII, 10]。

この，おそらくはハディース収集のための遊学の期間やそれ以後の彼の活動については，あまり詳しいことはわからないが，1466年より後，死ぬまでに少なくとも5回メッカに巡礼し，またメディナにも何度か立ち寄っている[DL : VIII, 14]。なお，以下で取り上げる *al-I'lān bi-l-tawbīkh* の清書(tabyīḍa)が終わったのは，この間の1492年1月ないしは2月，メッカにおいてである[IT : 169]。

サハーウィーが没した日付と場所については，諸史料で必ずしも一致しているわけではないが，それらの記述を総合すると，ヒジュラ暦902年 Sha'bān 月，西暦1497年の4月もしくは5月にメディナで死んだと考えられる[NI : 152-53 ; BZ : III, 361 ; KS : I, 53-54 ; KZ : VI, 174 ; SD : VIII, 15-17]。

生前，サハーウィーは，父親や弟とは違って，糸の商いに従事することはなかったようで，その点については何も触れていない。そのかわり，al-Khānqāh al-Sa'īd al-Su'adā' や，al-Kāmiliyya, al-Ṣarghatmishiyya, al-Ẓāhiriyya, al-Barqūqiyya, al-Fāḍiliyya, al-Mankūtimriyya の各マドラサでハディースを講義する職に就いたと記している[DL : VIII, 13-14, 31-32]。ただし，これらの職の在任期間については記述がなく，不明である。

彼には，*al-I'lān bi-l-tawbīkh* や *al-Ḍaw' al-lāmi'* 以外にも数多くの著作がある。それらのうち比較的よく知られているものは，イブン・ハジャルによるカイロのカーディー列伝 *Raf' al-iṣr* の補遺，続編である *al-Dhayl 'alā Raf' al-iṣr*，イブン・ハジャルの伝記 *al-Jawāhir wa-l-durar fī tarjamat shaykh al-Islām Ibn Ḥajar*，マクリージーの *al-Sulūk* の続編として書かれた年代記で，現在知られている限りでは，845年から857年(1441—53年)までを含む *al-Tibr al-masbūk fī dhayl al-Sulūk*[9]である。このように，総じて彼の著作は，他の著作の補遺や続編であることが多く，オリジナリティーに乏しいと言わざるを得ないが，*al-Ḍaw' al-lāmi'* のように，収集された情報量の多さ，詳細さに，その価値を認めることができよう[10]。

II　*al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-ta'rīkh* の概要

はじめに述べておかなければならないのは，実は本書の題名が，次のように文献によって多少異なって記載されていることである。

al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-ta'rīkh [GAL : II, 35, S.II, 32]

al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-tawrīkh [IT : 6]

『歴史家を非難する者に対する批判の表明』

al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma al-tawrīkh [DL : VIII, 17]

『歴史を非難する者に対する批判の表明』

al-I'lān bi-l-tawbīkh 'alā man dhamma 'ilm al-ta'rīkh [SD : VIII, 16]

『歴史学を非難する者に対する批判の表明』

al-I'lām bi-l-tawbīkh li-man dhamma aṣḥāb al-ta'rīkh [KZ : I, 156, VI, 175]

『歴史家を非難する者に対する批判の明示』[11]

このように相違は見られるが，その意味するところに大差はない。したがってここでは，普通一般に知られている通り，本書の題名を *al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-ta'rīkh* としておく。

さて，その構成は次に示す通りである。これは，序に当たる部分で述べられており[IT : 6]，

実際にもほぼこの通りの順序で書かれている。特に章立てがされているわけではないが，以下便宜的に各部分を1～13章と呼ぶことにする。[　]内の数字は本書のページ数を指す[12]。

0．序[5-6]

1．歴史(ta'rīkh)という語の言語学的定義[6-7]

2．専門用語(iṣṭilāḥ)としての歴史の定義[7]

3．歴史の主題[7]

4．歴史の利点[7-46]

5．歴史の目的[46-47]

6．歴史の法的分類[47-50]

7．歴史の有用性に関する根拠[50]

8．歴史を非難する者への批判[50-63]

9．歴史家の要件[63-78]

10．ヒジュラ暦の起源[78-84]

11．歴史書のリスト[84-163]

12．歴史家のリスト[153-160]

13．個人評価(al-jarḥ wa-l-ta'dīl)を行なった者のリスト[163-169]

まず，1章で「歴史」ta'rīkh という語の言葉の意味や，その語源がアラビア語かどうかといったことが，数人の説を引いて論じられる。そして2章で，歴史とはこの世に起こった出来事を研究する学問の分野であること，3章で，その主題は人間とそれを取り巻く状況であるということが簡潔に述べられる。

4章では，歴史の利点，有用性とは何かが論じられている。ここは全体の約四分の一に当たり，最後に付けられているリストを除けば，最も大きな部分を占める。したがって，サハーウィーの主張の根幹がここに書かれていると考えられるが，内容的には同じ様な主張を，さまざまな文献を引用して，繰り返しているだけである。要するに，歴史の利点とは，それを学ぶことによって，過去の人物や事件について正確に知ることができるということ，および過去の事例を教訓とし，良いことを見ならい，似たような失敗を避けることができることにあるとしている。正しい歴史の知識が必要なのは，そのことがハディースの真偽の判定に関わってくるからであるが，このあたりの議論は，ハディース学者であったサハーウィーならではといったところであろう。

これに続けてサハーウィーは，歴史の目的が神の恩寵を求めることであると簡単に述べた後(5章)，6章で，法的に見て歴史がどの範疇に属するのかについて論じる。そこでは，過去のことを正しく伝えているものや教訓となる話を載せている歴史書は，ムスリムにとって必要なもの(wājib)であるが，間違ったことや不必要な事柄を書いている歴史書は，禁止されるもの(ḥarām)であるといった具合に，歴史は，その伝えられる内容によって，さまざまな法的範疇に属すると述べる。

7章の歴史の有用性に関する根拠については，既に4章で挙げたとされるだけである。

8章では，例えば，歴史書は単に娯楽のための読み物にしか過ぎないのだとか，戦争やある国の征服がいつ起こったというようなことを知って何の役に立つのか，など歴史に対する5つの批判に一つ一つ反駁している。ここで最も多くのページが割かれているのは，歴史家が，ある人物の伝記を書く場合，その人について否定的なことを書いても良いのか，それは中傷ではないかという非難に対する反論である。これは当時，少なからず議論を呼んだ問題のようである。この件に関して，イブン・ハジャルやアイニー al-'Aynī (d. 1451) など5人のムフティーによりファトワーが出されており，サハーウィーはそれらを部分的に引用している[13]。5人のムフティーはいずれも，正しい歴史の知識を伝えるためには，個人をけなすようなことがあっても仕方ないという見解をとっており，サハーウィー自身も同意見である。マムルーク朝時代には非常に多くの伝記集が書かれたが，伝記の記述をめぐってこのような議論があったことは，興味深い事実である。本書執筆の動機も，こうした事情を背景としているであろう。

続く9章で，歴史家には公正さと正確さが求められることが述べられた後，10章で，ヒジュラ暦を導入したのが誰で，いつであったかに関する諸説が紹介される。

そして最後の3章で，歴史書，歴史家，個人評価を行なった者がリストアップされており，全体のほぼ半分が当てられている。

11章の歴史書のリストのところでは，まずザハビー al-Dhahabī (d. 1348) による分類に則って，各項目ごとに歴史書またはその著者が列挙され，次にサハーウィー自身による分類に従って，やはりそれぞれの項目ごとに書名，著者名が挙げられている。この2種類のリストには重複して挙げられている文献があり，また後の方のサハーウィーの分類に基づくリストには空欄があるので，この箇所は，書き加えを含め改訂することが意図されていたのであろうと推測できる[14]。

次の歴史家のリスト(12章)は，歴史書のリストの途中に挿入されており，アルファベット順に歴史家の名前が列挙されている。このリストは al-Mas'ūdī (d. 956-57), *Murūj al-dhahab* を基に，サハーウィーがそれを補ってできあがったものであると Rosenthal 氏が指摘している [Rosenthal 1968 : 501, n. 4 ; *cf.* MZ : I, 10-20]。

13章は個人評価を行なった者(a'imma al-jarḥ wa-l-ta'dīl/ al-mutakallimūn fī al-rijāl)のリストである。al-jarḥ wa-l-ta'dīl とは「批判と訂正」という意味であるが，ハディース伝承者の性格や経歴を調べ，その人の伝えるハディースが信頼できるものかどうかを確定することである。すなわち，al-jarḥ wa-l-ta'dīl を行なった者というのは，これに関する著作のあるハディース学者のことを指す。このようなリストが付けられたのは，サハーウィーがハディース学者であったということのほかに，8章で，伝記の記述が個人への中傷になっている場合があるという非難に対して反論がなされていたことと関係があろう。

以上が *al-I'lān bi-l-tawbīkh* の構成とその大まかな内容である。

本書は,秩序だった構成をとっておらず,また,歴史の主題や目的,歴史家の要件が述べられるなど,歴史を書く者の心得に関する著作と見なせる面もあるが,その主旨は,題名通り,歴史家を非難する者に対して歴史学の有用性を論じるところにある。もっとも,そこで展開されている議論には,イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』と比べて,注目されるようなところはあまりない。

本書の史料的価値は,こうした議論の内容にではなく,多くの文献を論拠として書かれている点にある。サハーウィー自身によって書かれた部分は少なく,ほとんどが他の文献からの引用で占められている。

それでは,サハーウィーはどんな文献を参照して *al-I'lān bi-l-tawbīkh* を書いたのか。次にこの点について分析する。

Ⅲ *al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-ta'rīkh* 中の参照文献

al-I'lān bi-l-tawbīkh の中で言及されている文献は,11,12,13章のリストを含め,著者名,書名だけしか挙げられていないものも入れると,概算で1000以上を数える。

これらのうち,以下の基準に則って,サハーウィーが直接利用できたと考えられる文献を選び出すことにする。記号は,添付した表の種別の記号を示している。

B：書誌的な情報について記されている文献

H：サハーウィー自身の蔵書

Q：文中で引用されている文献

R：内容について比較的詳細に言及されている文献

S：サハーウィーが学んだとする文献

B：「書誌的な情報について記されている文献」とは,どこのマドラサに所蔵されているとか,某の蔵書であるとか,あるいはサハーウィーがそれを直接見たといった記載がされているものである。ただし,例えば全何巻で出版されているというような,しばしば見られる書物の形態について言及されている文献は含めていない。Q：「文中で引用されている文献」については,挙げられている典拠が孫引きであったり,あるいは逆に典拠が示されていない場合があって,その確定が難しいが,本書を英訳したRosenthal氏によって可能な限りその作業がなされているので,それに全面的に依拠している。なお,いくつかの例について,典拠とその引用文とを比較してみたが,ほぼ正確に引き写されていると言える。

さて,これらの基準を満たす文献は,表に挙げた164点である。もちろん,引用されたり,特にコメントされていない文献でも,サハーウィーが実際に参照していたものは,さらに多かったと思われる。しかし,彼がどのような文献を参照していたか,その傾向を探るためには,サンプル数として十分であろう。

まず,これらの文献がいつ頃書かれたものであるかについて,著者の没年を目安にして見て

みよう。

最も古いのは，Wahb b. Munabbih（d. 728-33?），*Kitāb al-Mubtada'* であるが，このような古い文献が参照されることは少なく，ほとんどが12世紀以降の文献であり，120点，全体の73％を占める。さらに，その中でもサハーウィーと同時代に近づくほど参照されている文献の割合が多くなり，al-Muṭarrizī（d. 1213），*al-Mughrib* 以後，13世紀以降に書かれたと思われる文献が101点で，全体の約62％，Baybars al-Manṣūrī（d. 1324/25），*Zubdat al-fikra* 以後，14世紀以降の文献が72点，約44％に相当する。このような傾向は，サハーウィーが引用したと考えられる文献（表の種別記号 Q/Q?），サハーウィーが学んだり，利用したとする文献（S/S?），書誌情報について記されている文献とサハーウィーの蔵書（B/H），いずれについて見ても，当てはまる。引用文献，全83点のうち，12世紀以降のものが63点（79％），13世紀以降49点（59％），14世紀以降34点（41％）である。サハーウィーが学んだ，ないしは利用したとする文献は，40点中31点（78％）が12世紀以降，28点（70％）が13世紀以降，23点（58％）が14世紀以降の文献であり，書誌情報のある文献とサハーウィーの蔵書では，45点中34点（76％），30点（67％），21点（47％）である。すなわち，いずれの場合にも，全体のほぼ四分の三が12世紀以降の文献で占められ，約6割が13世紀以降，さらにそのうちの7割から8割，全体の4割から5割は14世紀以降の文献であったことになる。したがって，サハーウィーは自分に近い時代に著された文献を主に参照して，*al-I'lān bi-l-tawbīkh* を書いたと言うことができる。書誌情報のある文献およびサハーウィーの蔵書の分析結果を見るまでもなく，当然のことながら，新しい文献の方が利用しやすかったという写本の流通事情が関係しているであろう。

次に地域について，初期イスラム時代のハディース学者のように広い地域にまたがって活動していた者もあり，彼らがどこで執筆したかを確定することが困難な場合もあるが，著者の主要な活動地域をもとに分析してみる。その際，al-Gharīqī，*al-Mu'jam* と *Akhbār al-Ṭāghiyat Tīmūr* の2点は除外することにする。前者は著者の経歴が不詳のため，後者は著者不明のためである。

最も多いのは，マムルーク朝の領内であったエジプト・シリアで著されたと思われる文献で，全162点中82点，51％に相当する。次いでイラク以東の文献が51点（31％），エジプトより西のマグリブ・アンダルスの文献が15点（9％），ヒジャーズ・イエメンのものが13点（8％）と続き，残る1点がアナトリアである（al-Kāfiyājī，*al-Mukhtaṣar fi' ilm al-ta'rīkh*）。

ここで注意しなければならないのは，それらの文献の執筆年代との関わりである。13世紀以降の文献99点では，73点（74％）がエジプト・シリアの文献，11点（11％）がヒジャーズ・イエメン，8点（8％）がマグリブ・アンダルス，6点（6％）がイラク以東，1点がアナトリアであり，イラク以東の文献でその割合の著しい減少が見られる。それが，14世紀以降の文献70点になると，エジプト・シリアの文献が56点（80％），ヒジャーズ・イエメンが11点（16％），マグリブ・アンダルスが2点（3％）となって（アナトリアを除く），サハーウィーが頻繁に訪れていたヒジャーズ（イエメン）の文献の割合が増す一方で，もはやイラク以東の文献は見られな

い[15]。また,地名がアルファベット順に並べられ,各地方ごとにその地の地方史の書名ないしは著者名が挙げられている11章「歴史書のリスト」中の地方史の項目[IT : 121-35]にも,さらに付け加えられる東方の文献は見当たらない。

この結果から,まずわかることは,*al-I'lān bi-l-tawbīkh* を書くためにサハーウィーが参照した文献が主として,彼の活動した地域であるエジプト,シリア,ヒジャーズ(イエメン)の文献だったことである。また,13世紀以降の東方の文献はほとんど見られないが,それは,その地域からの情報が次第に入手しにくくなったためか,あるいは,サハーウィーのそれらの文献に対する関心がさほど高くなかったためであると考えられよう[16]。一方,西に目を転ずると,彼が実際には訪れていないマグリブ・アンダルスの文献を参照しており,当時,西方とエジプト・シリアなどとの間では,ある程度の交流が続いていたことを窺わせる。

さらに,サハーウィーがアナトリアのウラマーについて「彼らの話(akhbār-hum)が自分たちに伝えられることは少ない」[IT : 144]と述べていることをも考慮に入れるならば,要するに,彼が情報を得られた地域とは,アラビア語圏に限られていたと言うことができる。事実,*al-I'lān bi-l-tawbīkh* の中にペルシア語やトルコ語の文献は見られないのである[17]。

おわりに

以上の分析結果を踏まえ,マムルーク朝時代後期のヒストリオグラフィーに関連することとして,次の2点を指摘しておきたい。

第一に,サハーウィーが *al-I'lān bi-l-tawbīkh* 中で参照している文献の書かれた時期や地域は,そのどちらについても上述のように偏りが見られるが,こうしたことがどれだけ当時の状況を反映しているかという問題である。

ここで,特に地理的範囲に関して,サファディーal-Ṣafadī (d. 1363)の伝記集 *al-Wāfī bi-l-wafayāt* を分析した van Ess 氏の研究[van Ess 1976 ; van Ess 1977]が比較の材料を提供してくれる。それによれば,サハーウィーより約1世紀半前に,主にシリアで活動していたサファディーの情報収集範囲における特徴として,マグリブ・アンダルスの文献に詳しいこと,13世紀後半以後の東方への関心が低いことが挙げられるという[van Ess 1976 : 246-47 ; van Ess 1977 : 105-06]。これは,さきの分析結果に一致するものである。したがって,マグリブ・アンダルスとの間に一定の交流のあったこと,それに対してイラク以東の地域とはほとんど交流がなかったか,それらの地域に対する関心が乏しかったこと[18]は,14世紀以降のマムルーク朝治下の社会における一般的な状況であったと見なしてよいであろう。すなわち,サハーウィーの利用した文献の偏りは,このような状況下における当時の写本の流通事情を反映したものであると考えられる。

第二に,マムルーク朝時代の歴史家に対するサハーウィーの見解に関してである。

サハーウィーがマムルーク朝時代のエジプト・シリアの文献を最も多く参照していたこと

は上で見た通りであるが，その中でも師のイブン・ハジャル，ザハビー，マクリージーを高く評価して，彼らの著作を多く利用している一方で，同じく多くの著作を参照しているal-Subkī (d. 1370)に対しては批判的である。また，その著作は *al-I'lān bi-l-tawbīkh* 中で直接参照されていないものの，アイニーには好意的であるが，イブン・タグリービルディーにはほとんど言及されることがない[19]。当然，こうした見解の差はサハーウィーの個人的感情に由来している面が強いであろう。しかしまた，歴史家の間に何らかの党派ないしは派閥があったことを想定し，それが影響を及ぼしているとも考えられるだろう[20]。そうであれば，史料そのものを対象としたテキスト・クリティークだけでなく，著者の経歴や人間関係を明らかにすることも重要である[21]。

冒頭で述べたように，マムルーク朝時代のヒストリオグラフィーに関する問題に対して，研究者はこれまであまり注意を払ってこなかった。本稿は，ヒストリオグラフィーの問題を直接扱ったわけではなく，当時の，歴史叙述をめぐる社会の状況の一端を示したに過ぎない。今後の課題は，ここで指摘した点を考慮に入れつつ，各々の史料，著者について分析していくことであろう。

注

1）マムルーク朝時代のヒストリオグラフィーに関するLittle氏のその他の研究については，*History and Historiography of the Mamlūks*, London, 1986に再録されている諸論文参照。

2）Guo 1997で言及されている研究(ex. U. Haarmann, *Quellenstudien zur frühen Mamlukenzeit*, Freiburg, 1969)のほか，A.R. Guest, "A List of Writers, Books, and other Authorities mentioned by El-Maqrīzī in his Khiṭaṭ", *Journal of the Royal Asiatic Society* (1902), pp. 103-25 ; van Ess 1976 ; van Ess 1977 ; 太田敬子「Ibn ash-Shiḥna のアレッポ史についての研究」『オリエント』32(2) (1989), pp. 90-102などを挙げることができる。これら以外にも，研究書や史料の校訂に付けられた序文，補遺で，関連する史料について論じられている場合がある。

3）1995年春から1997年春まで続けられた本書の講読会に筆者も参加していた。その参加者の方々(岩武昭男，近藤真美，谷口淳一，村田靖子，沼田敦の各氏)には，本稿作成の上だけでなく，数々の御教示をいただいた。記して謝意を表する。

4）イスラーム世界の史学史を扱った研究書の一部をなす[Rosenthal 1968 : 263-529]。本稿注12)および本文中で後述するように，*al-I'lān bi-l-tawbīkh* を利用する際には，この英訳を参照することが不可欠であり，また便利でもある。

5）彼の自伝とされる *Irshād al-ghāwī* [GAL : S. II, 31]は，今回利用できなかった。

6）拙稿「14世紀末—16世紀初頭エジプトの大カーディーとその有力家系」『史林』79 (3) (1996), pp. 17-19参照。

7）前掲拙稿, pp. 19-20参照。

8）この点についてC.F. Petry氏は，サハーウィーの家系がウラマーの名家であったとするが[C.F. Petry, *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton, 1981, pp. 8-9 ; idem., "AL-

SAKHĀWĪ", *EI*[2]], 誤りとすべきである。

9) 現存する唯一のものとされる写本の校訂(Cairo, 1897) [GAL : II, 39, S.II, 37]では, 857/1453年までしか記述がないが, サハーウィー自身の書きぶりからすると[DL : VIII, 17 ; IT : 121, 152], さらに後の年代までを含んでいた可能性が高い。

10) サハーウィーの著作の詳細については, DL : VIII, 15-19 ; KZ : VI, 174-76 ; GAL : II, 34-35, S.II, 31-33参照。

11) 今回利用した *Kashf al-ẓunūn* の刊本には A'lām「印」と読むように母音符号がつけられているが[KZ : I, 156], I'lām「明示」と読むべきであると考える。

12) 本書の刊本には, 本稿で利用した1349/1930-31年ダマスクスで刊行されたもののほかに, 1963年バグダードで刊行されたものと1986年ベイルートで刊行されたものとがある。ダマスクス版は不十分な校訂とされているが[Rosenthal 1968 : 268-69], バグダード版とベイルート版はともに Rosenthal 氏の英訳本をアラビア語に重訳したものであって, 校訂本ではない。Rosenthal 氏の英訳は, ダマスクス版をもとにしているが, さらにライデンの写本とダマスクス版の校訂者の利用したカイロの1写本も参照されており, 現段階では, ダマスクス版テキストと Rosenthal 氏の英訳本をあわせて用いる必要がある。

13) これらのファトワーのオリジナルが校訂されていて, 容易に参照できる。Fu'ād Sayyid, "Shurūṭ al-Mu'arrikh fī Kitāba al-Ta'rīkh wa-l-Tarājim", *Revue de l'Institut des Manuscrits Arabes*, II (1375/1956), pp. 162-77.

14) 重複して挙げられている文献の例は, 'Iyāḍ b. Mūsā al-Yaḥṣubī, *al-Shifā'* [IT : 91, 121], al-Qasṭallānī, *al-Ishrāf 'alā manāqib al-ashrāf* [IT : 106, 108]。空欄の例は, IT : 128, 133.

15) もっとも, この分析にあたって, ヒジャーズの文献として扱った al-Lughawī al-Fīrūzābādī, *al-Bulgha fī a'immat al-lugha* は, 著者がシーラーズなど東方でも活動しており[GAL : II, 181ff.], イラク以東の文献に含めることができるかもしれない。

16) 1482年メディナにおいて, サハーウィーがシーラーズ出身の学者 Ibn Rūzbihān (d. 1521) に会っていたことが知られており[磯貝健一「シャイバーニー・ハーンとウラマー達」『東洋史研究』52 (3) (1993), p. 64, 注45], 東方の事情について知る機会が彼になかったわけではない。要因としては, サハーウィーの関心の低さの方が重要であったかもしれない。

17) ただし, アミール伝の中に挙げられている *Akhbār al-Ṭāghiyat Tīmūr* [IT : 98]が, ペルシア語の著作であった可能性を否定することはできない。

18) 岩武昭男「ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書」『アジアの文化と社会』(法律文化社, 1995年)は, イルハン朝治下とマムルーク朝治下の社会の交流が断絶していたとし, それに至る要因の一つをラシードの著作活動に求めている(p. 301)。

19) サハーウィーがイブン・タグリービルディーに対して批判的であったことについては, W. Popper, "Sakhāwī's Criticism of Ibn Taghrī Birdī", in *Studi orientalistici in onore di Giorgio Levi della Vida*, II, Rome, 1956, pp. 371-89参照。

20) Little 氏は, エジプトで書かれた歴史書とシリアで書かれた歴史書との間で観点や記載される内容に差が見られること, それぞれの地域の歴史家に地方意識があったことを指摘している[Little 1970 :

95, 108]。またGuo氏は，ザハビーが現れるまでの時期(13世紀終わりから14世紀初め)に限定した上で，エジプトの歴史家とシリアの歴史家との間に出自や経歴における相違が見られるとする[Guo 1997 : 29-33]。ただし，その一方でGuo氏は，特に文体上の特徴に関して，エジプトの歴史家たちに「学派 "school"」と呼べるような共通点を見出すのは難しいとし，エジプトとシリアの歴史家の間に単純に「学派」の違いを設けるべきではないと注意を促している[Guo 1997 : 37-41]。

21) Guo氏も，今後マムルーク朝時代のヒストリオグラフィー研究を進めるにあたって，ザハビーやマクリージーなどの歴史家の生涯についての研究が必要であると指摘している[Guo 1997 : 27-33]。

参考文献

BZ : Ibn Iyās, *Baḍā'i' al-zuhūr fī waqā'i' al-duhūr*, 5vols., Wiesbaden, 1960-75.

DL : al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi' li-ahl al-qarn al-tāsi'*, 12vols., Bayrūt, n.d.

IT : al-Sakhāwī, *al-I'lān bi-l-tawbīkh li-man dhamma ahl al-ta'rīkh*, Dimashq, 1349A.H.

KS : al-Ghazzī, *al-Kawākib al-sā'ira bi-a'yān al-mi'a al-'āshira*, 3vols., Bayrūt, 1979.

KZ : Ḥājjī Khalīfa, *Kashf al-ẓunūn*, 6vols., Bayrūt, 1994.

MZ : al-Mas'ūdī, *Murūj al-dhahab*, 9vols., Paris, 1861-77.

NI : al-Suyūṭī, *Naẓm al-'iqyān*, New York, 1927.

SD : Ibn 'Imād al-Ḥanbalī, *Shadharāt al-dhahab fī akhbār man dhahaba*, 8vols., al-Qāhira, 1350-51A.H.

GAL : Brockelmann, C., *Geschichte der arabischen Litteratur*, 2vols., 3 supplements (repr.), Leiden, 1996.

Guo, Li (1997) Mamluk Historiographic Studies: The State of the Art, *Mamlūk Studies Review*, I, 15-43.

Little, D.P. (1970) *An Introduction to Mamlūk Historiography*, Wiesbaden.

Rosenthal, F. (1968) *A History of Muslim Historiography* (2nd.rev.ed.), Leiden.

van Ess, J. (1976) Ṣafadī-Splitter, *Der Islam*, 53(2), 242-66.

van Ess, J. (1977) Ṣafadī-Splitter, *Der Islam*, 54(1), 77-108.

[付記]本稿は，オリエント学会第38回大会(1996年10月27日)における口頭発表をもとにしている。当日，貴重なコメントをくださった方々に感謝申し上げたい。

表 サハーウィーの参照文献

種別	書名	著者	没年	活動地域
Q?	al-Zuhrat al-'uyūn wa-jalā' al-qulūb	al-Miṣrī	8c-10c?	エジプト？
S	Ṭabaqāt al-'ulamā' al-miṣrīyīn?	Ibn Yūnus al-Ṣafadī	958	エジプト
R	?	Ibn Muṭarrif al-Kinānī	1022-23?	エジプト？
Q	'Uyūn al-ma'ārif	al-Quḍā'ī	1062	エジプト*
Q	Tabyīn kadhib al-muftarī	Ibn 'Asākir	1176	ダマスクス*
B, Q?	Ta'rīkh madīnat Dimashq	Ibn 'Asākir	—	—
Q, S	Mu'jam al-safar	al-Silafī	1180	エジプト*
Q	Fatḥ al-Qudsī	'Imād al-Dīn al-Iṣfahānī	1201	シリア*
R	Kamāl fī ma'rifat asmā' al-rijāl	al-Jamma'īlī	1203	シリア, カイロ
Q	Akhbār al-duwal al-Islāmiyya	al-Azdī	1216	エジプト
R	Kitāb al-Tawwābīn	Ibn Qudāma	1223	ダマスクス*
Q	al-Lubāb	Ibn al-Athīr	1233	モスル, シリア*
Q	al-Kāmil fī al-ta'rīkh	Ibn al-Athīr	—	—
B, R	al-Ta'rīkh al-Muqtafā (al-Muẓaffarī)	Ibn Abī al-Dam	1244	ハマー
Q	Mir'āt al-zamān fī tawārīkh al-a'yān	Ṣibt Ibn al-Jawzī	1257	ダマスクス
B, R	Bughyat al-ṭalab	Ibn al-'Adīm	1262	アレッポ*
Q	Qawā'id al-kubrā/al-ṣughrā?	Ibn 'Abd al-Salām	1262	シリア, カイロ
Q	Tahdhīb al-asmā' wa-l-lughāt	al-Nawawī	1277	ダマスクス
Q	Ṭabaqāt al-fuqahā'	al-Nawawī	—	—
R	Rawḍat al-ṭālibīn	al-Nawawī	—	—
B	Ta'rīkh Miṣr	Ibn Muyassar	1278	エジプト
S	al-Mu'jam	Majd al-Dīn Ibn al-'Adīm	1278-79	アレッポ*
Q	Wafāyāt al-a'yān	Ibn Khalliqān	1282	シリア, カイロ
B	?	al-Lūrī al-Kātib	1288-89	ダマスクス
S	al-Mu'jam	al-Abarqūhī	1302	カイロ
B, S	al-Mu'jam	al-Dimyāṭī	1306	エジプト
B	Zubdat al-fikra fī ta'rīkh al-hijra	Baybars al-Manṣūrī	1324-25	エジプト, シリア
B	Dhayl 'alā Ta'rīkh Ibn Khalliqān?	Faḍl Allāh b. Abī al-Fakhr	1325-26	エジプト, シリア？
B	Dhayl Mir'āt al-zamān	al-Yūnīnī	1326	バアルバック
B, S	Riḥla?	al-Tujībī	ca. 1330	シリア
H, S	Ta'rīkh Miṣr	Quṭb al-Dīn al-Ḥalabī	1335	シリア, エジプト
B	Ḥawādith al-zamān	al-Jazarī	1338	ダマスクス
Q	al-Muqtafā	al-Birzālī	1339	シリア
R, S	Tahdhīb al-Kamāl	al-Mizzī	1341	ダマスクス

Q, S	al-Ṭāli‘ al-sa‘īd	al-Udfuwī	1347	エジプト
B?	al-Juma‘ al-muthannā	Ibn Maktūm	1348	エジプト
Q	Irshād al-qāṣid ilā asnā al-maqāṣid	al-Akfānī	1348	カイロ
Q	al-Durr al-naẓīm fī-l-‘ilm wa-l-ta‘līm	al-Akfānī	—	—
B, S	al-Mu‘jam al-kabīr	al-Dhahabī	1348	ダマスクス, カイロ
Q	al-Amṣār dhawāt al-āthār	al-Dhahabī	—	—
Q	Ta’rīkh al-Islām	al-Dhahabī	—	—
R	Ṭabaqāt al-qurrā’	al-Dhahabī	—	—
Q	Naṣīḥa al-Dhahabiyya li-Ibn Taymiyya	al-Dhahabī	—	—
Q	Bayān zaghal al-‘ilm	al-Dhahabī	—	—
S	Mīzān al-i‘tidāl fī tarājim al-rijāl	al-Dhahabī	—	—
B	Masālik al-abṣār	al-‘Umarī	1349	カイロ, シリア
R	Kitāb Iṣlāḥ Ibn al-Ṣalāḥ	‘Alā’ al-Dīn al-Mughulṭāy	1361	カイロ
Q?	al-Wāfī bi-l-wafayāt	al-Ṣafadī	1363	シリア
B	al-Miṣbāḥ al-munīr?	al-Fayyūmī	1368-69	エジプト？
B, S	al-Mu‘jam	Tāj al-Dīn al-Subkī	1370	ダマスクス
Q	Mu‘īd al-ni‘am	Tāj al-Dīn al-Subkī	—	—
Q	Ṭabaqāt al-Shāfi‘iyya al-kubrā	Tāj al-Dīn al-Subkī	—	—
S	Ṭabaqāt al-Shāfi‘iyya al-wusṭā	Tāj al-Dīn al-Subkī	—	—
Q, S	al-Mukhtār al-mudhayyal	Ibn Rāfi‘	1372	カイロ, シリア
Q	al-Bidāya wa-l-nihāya	Ibn Kathīr	1373	ダマスクス
Q	al-Jawāhir al-muḍiyya	al-Qurashī	1373	カイロ
B	al-Mu‘jam	Ibn Ḥabīb	1377	シリア
S	?	Ibn Muḥibb	1387	エルサレム, ダマスクス
S?	Dhayl Ṭabaqāt al-Ḥanābila	Ibn Rajab	1393	ダマスクス*
R	Kitāb (Ṭabaqāt) al-Ṣūfiyya	Ibn al-Mulaqqin	1401	カイロ, シリア
B, Q?	Kitāb al-‘Ibar	Ibn Khaldūn	1406	カイロ*
B	Nuzhat al-ānām fī ta’rīkh al-Islām?	Ibn Duqmāq	1407	エジプト
S	Ṣubḥ al-a‘shā	al-Qalqashandī	1418	エジプト
B	Dhayl Ta’rīkh al-‘Ibar	Walī al-Dīn al-‘Irāqī	1423	カイロ
R	al-Sīra al-nabawiyya?	al-Ibshīṭī	1432	カイロ
S	Durr al-muntakhab	Ibn Khaṭīb al-Nāṣiriyya	1440	アレッポ
B	?	Ibn Raslān	1441	エルサレム
Q	Taysīr wa-taqrīb?	Ibn ‘Ammār	1441	エジプト
Q	Khiṭaṭ	al-Maqrīzī	1442	カイロ
Q	Durar al-‘uqūd al-farīda	al-Maqrīzī	—	—
S	al-Sulūk li-ma‘rifat duwal al-mulūk	al-Maqrīzī	—	—

Q	I'lām bi-ta'rīkh ahl al-Islām	Ibn Qāḍī Shuhba	1448	ダマスクス
Q, S	Lisān al-Mīzān	Ibn Ḥajar al-'Asqalānī	1449	カイロ
R, S	Tahdhīb al-Tahdhīb al-Kamāl	Ibn Ḥajar al-'Asqalānī	—	—
Q, S	al-Durar al-kāmina	Ibn Ḥajar al-'Asqalānī	—	—
R	Inbā' al-ghumr	Ibn Ḥajar al-'Asqalānī	—	—
Q	Raf' al-iṣr	Ibn Ḥajar al-'Asqalānī	—	—
S	al-Iṣāba fī tamyīz al-ṣaḥāba	Ibn Ḥajar al-'Asqalānī	—	—
S	Minḥat al-labīb fī sīrat al-ḥabīb	Shams al-Dīn al-Ba'ūnī	1467	ダマスクス
Q	Tuḥfa al-ẓurafā'	Shams al-Dīn al-Ba'ūnī	—	—
Q?	al-Nujūm al-zāhira	Ibn Taghrī Birdī	1470	カイロ
Q	al-Lamḥa al-Ashrafiyya?	Bahā' al-Dīn al-Ba'ūnī	1505	ダマスクス
Q?	?	al-Aṣma'ī	830-31	ホラーサーン
Q?	Ta'rīkh?	Abū Nu'aym a-Mulā'ī	834	クーファ
R	Ta'rīkh	al-Bukhārī	870	ブハラ*
Q	al-Jāmi' al-ṣaḥīḥ	al-Bukhārī	—	—
Q	al-Jāmi' al-ṣaḥīḥ	Muslim	875	ニーシャープール
R	al-Ṭabaqāt	Muslim	—	—
B	Akhbār ahl (umarā') al-Baṣra	'Umar b. Shabbah	876-78	イラク
B	Akhbār al-Madīna/A. umarā' al-Madīna?	'Umar b. Shabbah	—	—
B	Akhbār umarā' Makka?	'Umar b. Shabbah	—	—
B	al-Jāmi' al-ṣaḥīḥ?	al-Tirmidhī	883-92?	ホラーサーン*
Q	Kitāb al-Sunan	Abū Dāwūd	888-89	イラク*
Q	al-Ta'rīkh al-kabīr?	Ibn Abī Khaythama	893	バグダード?
Q	Ta'rīkh al-rusul wa-l-mulūk	al-Ṭabarī	923	バグダード
Q?	Kitāb al-Awā'il	Abu 'Arūba al-Ḥarrānī	930-31	ハッラーン
H	'Ilal al-ḥadīth?	Ibn Abī Ḥātim al-Tamīmī	939	トゥース
S	Kitāb Jarḥ wa-l-ta'dīl	Ibn Abī Ḥātim al-Tamīmī	—	—
Q	Akhbār wulāt Khurāsān	al-Sallāmī	ca. 950	ホラーサーン?
Q	Murūj al-dhahab	al-Mas'ūdī	956-57	バグダード*
Q	Kitāb al-Aghanī	Abū al-Faraj al-Iṣbahānī	967	バグダード
R	al-Kāmil	Ibn 'Adī (Ibn Qaṭṭān)	976	ジュルジャーン?
H, S	Thiqāt	Ibn Ḥibbān/Ibn Ḥayyān	979	イスファハーン
S	al-Ḍu'afā'	Ibn Ḥibbān/Ibn Ḥayyān	—	—
Q?	'Ilal	al-Darāquṭnī	995	バグダード
B, S	al-Istidrākāt wa-l-tatabbu'	al-Darāquṭnī	—	—
Q?	?	Ibn Fāris	1005-06	ハマダーン, レイ
H	Ta'rīkh Nīsābūr	al-Ḥākim al-Nīsābūrī	1014	ニーシャープール

Q?	Iklīl	al-Ḥākim al-Nīsābūrī	—	—
R	Mustadrak	al-Ḥākim al-Nīsābūrī	—	—
H	Ta'rīkh Bukhārā	Gunjār	1021-22?	ブハラ
R	Tajārib al-umam wa-'awāqib al-himam	Miskawayh	1030	レイ, バグダード
Q	Qiṣaṣ al-anbiyā'	al-Tha'labī	1035	ニーシャープール
S	Dhikr akhbār Iṣbahān	Abū Nu'aym al-Iṣbahānī	1038	イスファーハン*
Q	al-Jami' li-akhlāq al-rāwī wa-l-sāmi'	al-Khaṭīb al-Baghdādī	1071	イラク*
Q	Ta'rīkh Baghdād	al-Khaṭīb al-Baghdādī	—	—
S	Kitāb al-Dhamm al-kalām	al-Harawī	1089	ヘラート
Q	Iḥyā'	al-Ghazālī	1111	バグダード
Q	Faḍā'iḥ al-Bāṭiniyya	al-Ghazālī	—	—
Q	Musnad?	al-Daylamī	1115	ハマダーン
R	Firdaws	al-Daylamī	—	—
Q	Takmila (Dhayl) Ta'rīkh al-Ṭabarī	al-Hamdhānī al-Faraḍī	1127	ハマダーン?
H	al-Siyāq li-Ta'rīkh Nīsābūr	'Abd al-Ghāfir al-Fārisī	1134-35	ニーシャープール
B, Q	Ta'rīkh Balkh?	Nāṣir al-Dīn al-Madīnī	1161?	バルフ
B, Q	Shudhūr al-'uqūd fī ta'rīkh al-'uhūd	Ibn al-Jawzī	1200	バグダード
Q	al-Munṭazam	Ibn al-Jawzī	—	—
R	Mawḍū'āt	Ibn al-Jawzī	—	—
Q?	al-Mughrib	al-Muṭarrizī	1213	ホラズム, バグダード
B, R	al-Tadwīn	al-Rāfi'ī	1226	カズウィーン
B	Dhayl Ta'rīkh Baghdād	Ibn al-Dubaythī	1239	イラク
B, S	Dhayl Ta'rīkh Baghdād	Ibn al-Najjār	1245	バグダード
Q	?	Ibn al-Sā'ī	1276	バグダード
Q	Akhbār al-wuzarā'	Ibn al-Sā'ī	—	—
S	Thiqāt	al-'Ijlī	874-75	トリポリ(リビア)
H	Kitāb al-Ṣila	Maslama b. Qāsim	964	アンダルス*
R	Jāmi' bayān al-'ilm	Ibn 'Abd al-Barr	1071	アンダルス
S	al-Shifā' bi-ta'rīf ḥuqūq al-Muṣṭafā	'Iyāḍ b. Mūsā al-Yaḥṣubī	1149	アンダルス, マグリブ
Q	al-Madārik	'Iyāḍ b. Mūsā al-Yaḥṣubī	—	—
Q	?	Ibn Bashkuwāl	1183	アンダルス
Q	Rawḍ al-unuf	al-Suhaylī	1185	アンダルス
Q, R	Maṭla' al-anwār	Ibn Khāmis	ca. 1240	アンダルス?
Q?	Tuḥfat al-qadīm	Ibn 'Abbār	1260	アンダルス, マグリブ
B	Ṭabaqāt al-fuqahā'?	Ibn Sa'īd	1274, 86	アンダルス*
Q?	A'māl al-iḥtimāl?	al-Māyuraqī	1279-80	アンダルス?
Q?	Ma'ālim al-īmān	al-Qayrawānī	1297	カイラワーン

S	Takmila li-kitābay al-Mawṣūl wa-l-Ṣila	al-Marrakushī	1303	マラケシュ
B	Ta'rīkh Gharnāṭa?	al-Gharnāṭī	1355-57?	グラナダ
B, S	al-Iḥāṭa bi-ta'rīkh Gharnāṭa	Ibn al-Khaṭīb	1374	グラナダ
Q	Kitāb al-Mubtada'	Wahb b. Munabbih	728-33?	イエメン
B, S	al-Ḍu'afā'	al-'Uqaylī	934	ヒジャーズ
Q	al-Sulūk fī ṭabaqāt al-'ulamā'	al-Janadī	1332	イエメン
B	Zubdat al-a'māl wa-khulāṣat al-khulāṣat al-af'āl	al-Isfarāyinī	1360-61	ヒジャーズ
Q	Mir'āt al-janān	al-Yāfi'ī	1367	イエメン, ヒジャーズ*
Q	Naṣīḥat al-mushāwir	Badr al-Dīn Ibn Farḥūn	1372-76?	ヒジャーズ
Q	Ṭabaqāt al-Mālikiyya	Burhān al-Dīn Ibn Farḥūn	1397	メデイナ
Q	al-'Iqd al-fākhir al-ḥasan?	al-Khazrajī	1409	イエメン
B	al-Bulgha fī a'immat al-lugha	al-Lughawī al-Fīrūzābādī	1415	ヒジャーズ*
S	Shifā' al-gharām/'Iqd al-thamīn?	Taqī al-Dīn al-Fāsī	1429	メッカ*
Q	Tuḥfat al-zamān	al-Ahdal	1451	イエメン, メッカ
Q	Durr al-kamīn bi-dhayl al-'Iqd al-thamīn	Najm al-Dīn Ibn Fahd	1480	メッカ*
Q	Itḥāf al-warā bi-akhbār Umm al-Qurā	Najm al-Dīn Ibn Fahd	—	—
Q	al-Mukhtaṣar fī 'ilm al-ta'rīkh	al-Kāfiyajī	1474	アナトリア
S	al-Mu'jam	al-Gharīqī	14c?	?
S?	Akhbār Ṭāghiyat Tīmūr	Ibn 'Arabshāh??	?	?

[凡例]種別の記号については, 本文Ⅲ参照。

( )内の語句は別名を表し, /はいずれとも決定し難い場合を示す。

活動地域の欄中*の付されている地名は, それによって著者の活動地域を代表させている。

(京都大学大学院文学研究科)